
王の光

スチール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王の光

【Nコード】

N3320Z

【作者名】

スチール

【あらすじ】

今より少し未来を舞台にしたロボット小説です

ですが、私が書きたいのはロボットではなく小説なんですよね。ただ、書きたい内容にロボットが出てきたという感じですよ。私に実力があれば、そういった設定に頼らなくてもよかったですかもしれませんが

最初は「ガンダム」を作ろうとしていたのですが、プロットを作るうちに、「ガンダム」である必要性がなくなったのでやめました。

むしろ、雰囲気はコードギアスなどに近いですかね

要は何が言いたいかというと、思春期の男女が成長する過程を書きたいんです。今の私にしか書けないことなので。ファーストガンダムは別ですけど、最近のガンダムは主人公の成長よりもMSの成長になつてる気がします。アムロが成長しすぎてMC化したのと、撃墜されて新機体がチートってのは違いますよね

というわけで、私は主人公たちの成長を書いていきたいと思っています。ちよつと、こちらの作品も更新を頑張るつもりですので、少しでも気になった方は読んでいって下さいな。彼らと、あなたと、私と、みんなで何かを見つけていきましょう

1・後ろの席の女の子

まばゆい光に目が悲鳴をあげ、ジルヴェスター・クリューガーは夢から引き戻された。ついさっきまで見ていたはずである夢の内容は、もう思い出せない。おそらく大した内容ではなかったのだろう。今はただ、窓から入ってくる日差しが眩しくて仕方ない。

枕元に置いている目覚まし時計を見ると、時刻は七時を少し過ぎた頃だった。いつもより少し早い。もう完全に目が覚めたため、二度寝しようとも思わない。七時半にセットしていたアラームを解除し、彼はベッドから起き上がると部屋を出た。

洗面所で顔を洗い、寝癖を確認する。いつもに比べると、少ないように感じられた。ぐっすりと熟睡していたのだろうか。目覚めがよいのも納得だ。

「あら、早いね」洗面所に入ってきた彼の母親であるピアンカが驚いた様子を見せた。「おはようジル」

「おはよう。シリアルまだある？」

「確か、まだ残っていたわ」

「ありがとう」

ジルは急いで寝癖を整えて、洗面所を後にした。朝一からピアンカと話をするのはあまり好きではない。どうせ最後には、勉強しろなどの結論に行き着くのだ。

リビングでは既に父親であるオイゲンが食事を始めていた。口を動かしながら新聞を眺めている。その右手には、食べかけのパンがあった。ジルの好きなものだった。

「おはよう」オイゲンはジルに気づいていないようだったので、ジルから先に声をかけた。

「ん、ああ、おはよう」

「何か進展ある？」全くこちらを見ない父に対する苛立ちを隠しながら、ジルは尋ねた。進展というのは、数か月前に始まった戦争の

ことだ。

「バルト海近辺の地域で戦闘があったみたいだな。ロシア軍とチェスが戦ったらしい」

「チェスが出たの!? 戦果は!?!」

チェスという単語に、ジルは思わず身を乗り出した。チェスというのはエースパイロットが集う、我らがEUF ヨーロッパ連合軍の部隊名だ。戦争が始まってわずか数か月間に多くの戦果をあげ、何度もニューズなどのメディアに取り上げられている。高校生であるジルらにとっては憧れの存在であった。

「敵のザクールを六機撃破したそうだ。うち半数の三機が女王によるものだ」

「女王って、あのリア＝ローランだね。ザクールを四機って、すげえなあ」

ジルが感嘆の声をあげたとき、ちょうどテレビからもチェスという単語が聞こえてきた。顔を向けると、先ほど聞いた戦闘に関するニュースのようだった。父から聞いた、新聞に掲載されているものとはほぼ同じだったが、その後に映像が流された。どうやら、戦闘後に撮られたチェスのようだ。当然、軍の機密事項である人型兵器ザクールの映像はない。映っているのは隊員たちだけだ。

真っ白と真っ黒、どちらかのパイロットスーツに身を包んだ英雄たちが、とても戦闘後とは思えないほど和やかな表情を浮かべていた。こちらの損害はなかったといっていたため、そのためだろう。

白いパイロットスーツの背中に剣が描かれた男が映った。ヨーロッパ人なら誰もが知っているエースパイロット、アントニオ＝レアルだ。彼と話しているのは、対照的に黒いパイロットスーツを着た人物だ。わずかな胸の膨らみから、女性であることがわかる。彼女だけヘルメットを被ったままだが、それはいつものことで、そこからこぼれるようにして背中に流れている金髪が、黒い軍服に映えている。その姿こそがまさに女王、リア＝ローランだ。

「いつまで見ているつもりだ。早くしないと遅刻するぞ」

新聞を畳みながら父が言った。たしかに、いつもより早く起きたといつても、その後をゆつくりと過ごしてはいつもと同じになつてしまふ。ジルは慌ててシリアルに牛乳をかけ、口の中にかきこんだ。

《それでは、本日の運勢です》テレビから陽気な声が聞こえた。もうチェスの話題は終了したようだ。《赤・白・青・黒・黄色のボックスから一つを選んでください》

毎朝恒例のものだ。ジルは心の中で白と呟いた。占いとやらを信じているものではないが、この手のものは順位形式になっている。一位を当てられたら嬉しいといった程度のものだった。

《今日の一位は……白色です！新しい出会いが待っている日。ラッキーパーソンは、「後ろの席の女の子」になっています》

久しぶりに一位を当てられた。目覚めといい、今日は幸先が良い。それにしても、ラッキーパーソンが限定的なのが気になった。いつもなら、父親だとか親友だとか、そういったもののはずである。

後ろの席……ねえ

教室でジルの後ろに座っているのは、女子生徒だった。九月に新学期が始まり、既に二か月弱が経っているが、その姿を見たのは数えるほどしかない。病弱のようで、よく風邪などで休んでいるのだ。昨日も来ていなかった。

来ていない奴がラッキーって言われてもな

思わず苦笑しながら、ジルは食事を済ませ、学校へ行く支度にとりかかった。もとより、ラッキーパーソン 日によってはラッキープレイスであったりラッキーアイテム を気にしたことはない。今日に限って意識する必要もないだろう。

制服に着替え終わって家を出たときには、いつも家を出ている時刻と大して変わらなかつた。それでも、登校前の数分にかんりの価値があるのは事実だ。いつもより気持ちに余裕を持ちながら登校することができた。

教室に入っても、まだ生徒はほとんど来ていなかった。机に行く

つかカバンが置いてあるが、その持ち主は教室内にはいない。トイレにでも行っているのだろうか。教室に残っているのは、たった一人だった。

「おはよう」その生徒が口を開いた。

「お、おはよう。久しぶり……だね」

その生徒が座っている席の前にある机にカバンを置き、ジルも挨拶を返す。彼女 ソフィー・エツフェルと会話をするのは、これがまだ三回目ほどだった。ただでさえそうだった相手との会話は緊張するというのにも関わらず、今日の占いでラッキーパーソンとされた人物と迎えた突然の出会いだ。どうしていいか分からず、その後はお互いに沈黙のまま時間が流れた。

何か話さなければと思うも、普段から会わない彼女に何を話せばいいのかがるで分からない。彼女の長い金髪を見ながらジルは考えた。

しかし先に口を開いたのは、またしてもソフィーの方だった。

「クリューガー君は、世界史って得意？」

「へ？」

「世界史。私、あの授業あまり受けてないから、分からないところ多くて」

「あ、ああ、そうだね。えーと、苦手ではないけど得意でもない……かな。近代史、特にアメリカ合衆国の崩壊からなら得意なだけどさ、今授業でやっているところはあまり……」

「そう……」少し寂しそうな表情を浮かべて、ソフィーは続けた。

「学校は、好き？ この街 ロストクは好き？」

「好きだよ。両方とも」急に話が変わったことに戸惑いながらもジルは答える。「エツフェルさんは、嫌いななの？」

「ううん。好きよ。この学校も、この街も。私はフランス出身だけど、ドイツがここまで過ごしやすいとは思ってなかった」

「そう……。それなら良かった」

ソフィーが言っていることは本心だろうと思われた。しかしそれ

にも関わらず、その表情は相変わらず冴えない。とても、「好きだ」という会話をしている人の話し方とは思えなかった。

「今日の放課後、空いてる？」次にソフィーが口を開いたときには、もうその表情から憂いは消えていた。「ちょっと、つきあってほしいんだけど」

「別に用事はないけど……一体どうして」

ジルがソフィーに尋ねようとしたとき、ちょうど教室に他の生徒がゾロゾロと入ってきた。彼は何故か気恥ずかしくなり、それ以上彼女と会話を続ける気になれなかった。

結局放課後まで、彼女とは会話をしなかった。あまり意識したこともなく、顔も注視したことがなかったため気がつかなかったが、ソフィーの顔立ちはとても整っているように感じられた。病弱とのことだが、顔色は非常に良く見える。むしろ、かなりの健康体なのではないかと思えるほどだった。

しかし、放課後になっても彼女は話しかけてこなかった。もしかしたらジルが話しかけるのを待っているのではと思ったが、何をするかも聞かされていない状況で、自分からその話題に持っていくのも難しいと彼は感じていた。

帰る支度をしながら、話しかけるべきかどうか迷っていると、ジルの横を人が通った。まさかと思って確認すると、それはソフィーに違いなかった。彼は慌ててその後を追った。

一度こちらをチラリと振り返った彼女だが、そのまま再び前を向いて歩き続ける。ジルの存在には気づいていながら何も言っていないことに、彼は少し戸惑った。

学校を出て、右に曲がる。これはジルの家とは逆方向だった。一瞬だけ躊躇した彼だが、意を決して彼女についていくことにした。今まで全然関わってこなかったソフィーという女子生徒が自分に何を求めているのかが気になったし、そもそも彼女は今日のラッキーパーソンだ。占いを信じるとすれば、ついて行って損はないだろう。

その後、二人は一言も話さないまま歩き続けた。途中でジルが自

身の携帯端末で確認したところ、学校を出てから三〇分が経っていた。さすがに限界が近づいてきたジルは、ついに自分から口を開いた。

「あのさ！」自分の声に反応したソフィーが振り向いたのを確認し、彼は続けた。「どこに行くつもりなの」

「もうすぐ着く……。あと、五分くらい」

そう言われて、彼は何も反論できなかった。彼女は質問に答えていない。それでも、ここまで来て今さら引き返すという選択肢は彼の中になかった。

五分間、再び歩いていく。海から続く長い川に沿って歩いていると、彼女がついに足を止めた。その先には小屋があり、少しの間を取った後、彼女はその中に入ってしまった。

「ここは……誰も住んでいないの？」

「誰かが住んでいるように見えるの？」

彼女の問いに、ジルは首を振った。光は、窓から入ってくるわずかなものだけ。埃さえあまりないようだったが、家具なども何もないこの場所に、誰かが住んでいるとは思えなかった。

では、何故彼女はこの場所にジルを連れてきたのだろうか。まともな会話をしたのは、今日が初めてだ。それとも、彼女はずっとジルのことを気にしていたのだろうか。そして会話をした今日、ついにその思いを……。

「あのさ、結局俺はどうしたらいいんだ？」

「そうだったね。クリューガー君に、お願いがあるの」

暗がりの中、少し照れくさそうに彼女は話し始めた。これは間違いない。これまでも何度か経験したことがある、あの「告白」という行為だ。いきなり告白とは、病弱ということだが、なかなかアグレッシブなタイプだ。それでも学校からこれだけ離れた場所で告白するというのは、気持ちの整理をつけるためなのだろう。そう考えると、やはり可愛げがある。

どうするべきだろうか。まだ親しくないとはいえ、ソフィーの顔

立ち美しく、このチャンスを逃すのは惜しいように思われる。ジル自身も、彼女と親しくなりたいと思い始めていたところだ。そしてここでそのまま……。思わずにやけそうになる顔を必死に抑えて平静を装い、ジルは次の言葉を待った。

しかし先に聞こえたのは彼女の言葉ではなく、カサカサと床を何かが這うような音だった。

ジルは思わず後ずさりする。その音はだんだん大きくなっていき、二人に近づいてくるようだった。そして、彼の横を何か飛ぶのが感覚で分かった。

「うわっ」

自分でもビククリするほど情けない声が出た。しかし、暗い中で何がいるのかも分からない状況では仕方ないだろうと、彼は自分を正当化させた。

しかし、続いて聞こえるはずであるソフィーの悲鳴が聞こえない。代わりに聞こえたのは、異常なまでに冷静な彼女の声だった。

「大丈夫だよ」

「え？」

「この子は大丈夫」そう言って彼女は、ジルの前に両手を差し出した。その中心に、何かがある。「お願いって、このことなの」

ジルは必死に目を凝らす。薄い明りの中でようやく目が慣れてくると、その正体がようやく分かった。「……猫？」

「うん！ ナポレオンっていうの！」

「は？」

突然、彼女が饒舌になった。ジルが聞くまでもなく、彼女はこの（元）野良猫について語りだしたのだ。

その話によると、彼女はこのナポレオンと名付けられた猫を、三日前にこの付近で偶然見つけたそうだ。あまりの可愛さに一目ぼれした彼女はそれを飼うことにし、運よくこの場所を見つけたためにここで面倒を見ているらしい。家で飼わないのかと尋ねると、少し歯切れ悪く、家では飼えない決まりなのだと言われた。家族の誰か

が猫アレルギーなのだろうか。だが、それ以上はジルも尋ねなかった。

「で、お願いっていうのは……」

「それなんだけど。私、この子の面倒を見きれないのよね。今日はこうして餌を持ってきてあげられるけど、ほら、私、その……病弱だから……」

後半になって、彼女はだんだんと苦しそうになった。テンションの高いナポレオントークからの流れを引き継いだ前半は元気だったのだが。まるでわざと病弱体質を演じているかのようで、ジルは変に思った。もつとも、彼女が病弱を装う理由などどこにもない。考えすぎだろうと彼は自分を納得させた。

「だから、俺に手伝えと？」

「……ダメ？」

ナポレオンを両手で胸に抱きしめながら、彼女が言う。顔の位置はジルの方が上にあるため、それは必然的に上目遣いとなり、彼は思わず目を逸らした。

拒否できるわけがない。彼が予想していたお願いではなかったものの、その前に彼は彼女の魅力について考察していたのだ。その彼女にこういったお願いをされて、断れるわけがなかった。

「いいよ」視線をソフィーに戻し、彼は続ける。「でも、こっちからも一つだけお願いがある」

「なに？」

「病気なのは仕方ないかもしれないけど、これからはもっと学校に来てよ。体調管理をしっかりしてさ」

「えっと、その保証は……」

「じゃあ、ナポレオンは飢え死にするしかないね」

「頑張ります」

よほどこの猫が大事なのだろう。彼女は即答で前言を撤回した。

ジルは思わず吹き出しそうになりながら、続けた。

「それから……」

「お願いは一つって言ったじゃない」

「そうだっけ？　じゃあ二つで」抗議するソフィーを軽く流し、彼は口を開く。「俺のこと、ファーストネームで呼んでよ」

「え？」わけが分からないといった様子で、ソフィーが聞き返してきた。

「俺もエツフェルさんのこと、ソフィーって呼ぶからさ」ジルは少し身を乗り出し、視線を彼女に合わせる。「ダメ？」

「私、クリューガー君のファーストネーム知らない……」

「俺はジルヴェスター。長いからジルでいいよ、ソフィー」

「う、うん……。分かった、ジル……」

まだ慣れないからか、多少のぎこちなさはある。しかしそれでも構わない。いきなり親しくなるのは無理だろう。まずは少しずつ、二人の距離を縮めていければいい。

そこまで考えて、数分前まで彼は自分がソフィーから告白される気持ちでいたことを思い出した。今では彼が、彼女の魅力に取りつかれて、振り向いてもらおうとしている。彼は思わず苦笑いを浮かべた。

ソフィーにナポレオンを見せられて、一週間が経った。この間、彼女はジルとの約束を守るためか毎日学校に来て、一日を過ごした。この一週間は目立った戦闘もなく、ずっとこうだった日々が続けばいいのと思わざるをえなかった。とはいえ、仮に戦闘があったとしても、それが「チエス」の出撃を伴うものであれば、彼は大喜びして戦果を確認するのであるが。

しかし今日、ついにソフィーは学校を休んだ。今まで三日以上連続して来ることがなかった彼女にしては大きな進歩で、ジルとしても今日の休みは仕方がないと思えた。むしろ、無理をして病気を悪化させてしまえば元も子もない。

「ジル！　行つたぞ！」

不意に聞こえた声へ視線を向けると、ボールが自分の方へ飛んで

きていた。考え事をしているときにパスを出すのはやめてほしいが、さすがにそれを言うわけにはいかない。ジルは仕方なく胸でそれを上手くトラップすると、右足で軽く浮かせ、距離を詰めてきた相手ディフェンダーの頭を越した。そのままそれを抜き去ると、彼は相手のゴールに向かって走り出した。

サッカーには自信があつた。特にドリブルでは、同級生に負けることはありえなかつた。

いつもの通り、相手のディフェンスをかわしていく。四人ほど抜いたところで、キーパーと一対一になつた。

「ジル、こつちだ！」

味方からの声を無視し、彼はシュート体勢

に入る。彼が思いつき蹴つたボールは、ゴールポストの遙か上を越えていった。

「だから、パスだつて言つただろ」

「シュートだけは下手なんだよな」

「それさえ良ければプロにだつて行けるつてのに」

チームメイトの非難を聞きながら、ジルは顔をしかめる。レフェリーを務めている体育の教師も、苦笑いを浮かべていた。

その後、彼はゴール前でも味方にパスを出し続けて過ごした。記録したアシストは、一試合で四つだつた。

これで今日の授業は終了だ。最後が締まらない終わり方だつたが、切り替えようと努めた。今からあの小屋に行き、ナポレオンに餌をあげなければならぬ。

教室に戻り、制服に着替える。暑さのピークは過ぎたといえ、一時間動き続けた体は大量の汗をかいていた。それらをタオルで拭き、制汗スプレーを吹きかける。こういう日は、後ろにソフイーがいなくて良かったと思つてしまう。

そのとき、大きなサイレンが鳴り響いた。それは校内だけのものではないようで、どうやら街全体で鳴っているものが聞こえているらしい。ジルは、その音に聞き覚えがあつた。しかし、ここしばらく

く聞いていなかった音だった。

「おい、これって……」

「ああ」尋ねてきた友人に対してジルは頷く。「敵襲警報だ」

ジルの声を合図に、教室中が騒然となった。開戦時に知らされた敵襲警報だが、これまで一度も鳴ったことはなかった。ジルが住むロストクは敵の領地と接しておらず、空襲もポーランドを通過してくるとは考えにくいものであったからだ。

警報が鳴ってからすぐに、廊下をバタバタと走る音が聞こえた。

教師たちが対応に追われているのだ。ジルの教室にも、急いで担任が入ってきた。更衣室で着替えをしていた女子生徒らもゾロゾロと集まってくる。彼女らは一様に怯えた表情をしていた。

ソフィーは、大丈夫なのか？

彼女は家で休んでいるのだろう。しかし、もし家族が全員家を空けていたら、自分一人で逃げられるのだろうか。様子を見に行きたいが、ジルは彼女の家がどこにあるのかを知らなかった。

教師から、学校の地下にあるシェルターへ避難するよう指示があった。開戦時に説明を受けたが、まさか本当に使用するとは思っていなかった。彼は頭のどこかで、自分たちとは離れたところで起きている戦争だという認識があったのだ。

ソフィーも上手く逃げられただろうか。それだけを心配しながら、シェルターへの道を歩く。しかしそのとき、大事なことを思い出した。

ナポレオン！

さすがのソフィーも、彼 ナポレオンはオスだった を助けに行くことはできないだろう。しかし彼のことを助けたいとは思っているはずだ。ソフィーが学校を休んでいるときは、ジルがナポレオンの面倒を見るとというのが二人で交わした約束だ。

彼は列から外れると、どうしたのかと声をかけてくる同級生の声を無視して、急いで学校から出て右に曲がった。体育の後であるが、そんなことは言ってもらえない。腕を振り、ナポレオンの小屋へ向か

う。一度しか通ったことのない道だが、彼はそれをしつかりと覚えていた。

走っていると、少し離れたところから爆音が聞こえた。今、本当にこの街で戦闘が行われているのだという認識が彼の中でされる。本当にソフィーは大丈夫なのだろうか。しかしそれを確かめる術はない。携帯端末で連絡したくても、彼女はそれを持っていない。

行く手に煙が見える。さらに進むと、破壊された家々があった。少し恐怖を感じながらも、彼は走り続ける。敵の部隊は防衛軍が対応してくれるだろう。今の自分にできることは、一刻も早くナポレオンを保護することだ。

十分ほど走ると、小屋に辿り着いた。周りの建物は壊されたものが多かっただけに、最悪の事態も想定していたが、それは元の状態を維持していた。さすがに疲れたが、今はわずかな猶予もない。肩で息をしながら、彼は小屋の中に入った。

相変わらず暗い小屋の中で目を凝らすと、影が見えた。ナポレオンかと思って注いで見るも、それは猫の大きさではない。人影だった。

「誰？」その人影が尋ねてくる。曇った声だと思つと、どうやらその人物はヘルメットを被っているようだった。唯一分かるのは、女性だということだけだ。

「あ、近くの高校に通う、クリューガーって言います。ここで猫を飼っていたので、様子を……」

「あなた！」その女性が驚いたように近づいてくる。「じ……自分は軍人です。ここは危険ですので、私についてきてください」

よく見ると、彼女は黒いパイロットスーツを着ていた。軍人というのは本当らしい。しかし、どこかで見たことがあるような印象を受けた。それは、彼女がジルを先導して小屋から出ようとしたときに確信に変わった。

黒いパイロットスーツに、ヘルメットから溢れた金髪がかかっている。その雰囲気は、女王　リア＝ローランのものだ。

「ローラン中尉ですか？」

ジルの問いに、彼女は一瞬だけ答えるのを躊躇う様子を見せた。しかし答えないわけにはいかないと判断したのだろう。声は出さず、ただ頷いて見せた。

あの憧れていた「チェス」のメンバーにこんなところで会えるなんて、思ってもみなかった。これはナポレオンのおかげだと思ったとき、ようやく彼は自分がナポレオンを保護しに来たのだということ思い出した。ナポレオンは今、リアが両手に抱いている。

「あの、その猫……俺のなんですけど」

「え？」彼女は何故か驚いた様子を見せたが、すぐに彼を差し出してきた。「そうよね。これはあなたのよね。ごめんなさい」

「いえ、ありがとうございます」

「では、早く行きましょうか、ジル」

「はい」とジルは答えたが、何故か違和感を覚えた。思わず、彼は立ち止った。

「どうしたの、ジル。早く行か……」

そのとき、彼女もその変な感覚に気が付いたようだ。ジルも二回目にしてその原因が分かった。彼は、自分のファーストネームを名乗っていない。

彼のことをジルと呼ぶ人物は多いが、それは男に限ることだった。女で彼をジルと呼ぶ人物を、彼は一人しか知らない。その人物も目の前の女性と同じく、金色の髪が印象的だった。

「まさか……」

「と、とにかく！ 早く行かないと」

リアは動揺を隠すように、早く小屋から出ようとした。だがジルはそれをさせない。少し躊躇したが、ついにそれを口にした。

「もしかして、ソフィーなのか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3320z/>

王の光

2011年12月11日14時51分発行